その「でも」は反論なのか～話し合いにおける同意／不同意表現に関する一考察

A Discussion on Agree-/Disagreements in Group Discussions

水上悦雄[†]，柏岡秀紀[†]
Etsuo Mizukami, Hideki Kashioka

[†]情報通信研究機構
National Institute of Information and Communications Technology
etsuo.mizukami@nict.go.jp

Abstract

This study reports a result of analysis for the ways of agreement/disagreement expressions presented by the participants of group discussion. Through the analysis, it was suggested that Contrastive Discourse Markers and the preceding some expressions could be clues to comprehend the structure or form of agreement/ disagreements on discussions.

Keywords — Evaluation of Discussion, Agreement /Disagreement, Contrastive Discourse Marker

1. はじめに

Pomeranzs (1984)が指摘するように，ある発話に対する応答が，agreement(同意)として作用するか, disagreement(不同意)として作用するかは，必ずしも明確な言語的表現(例えば「私は賛成/反対です」)によらず，発言間の対比関係はそれほど明示的ではない．一方で，‘but’や’and’などのDiscourse Connectives (Schifrrin, 1987)と呼ばれる接続表現(談話標識)は，後続する発話内容を予測する手がかりとして利用可能であることが指摘されており，中でも’But’や’However’は，後続する発話が，先行発話に関連する命題に対する否定や対比関係にあることを示す，対比談話標識Contrastive Discourse Markers (Fraser, 1996)と呼ばれ，不同意に関わる談話の構造理解のための標識として期待される．

本研究では，話し合いのプロセスを客観的に評価するための記述枠組みの作成を最終目標とし，話し合いの過程で現れる，様々な同意/不同意表現を整理し，それらの構造的理解に向けた記述の方法論を模索している．特に本発表では，話し合いを対象とし，日本語の話し言葉でもっとも使用頻度の高い(陳, 2008)という「でも」の分析を中心として，話し合いにおける同意/不同意が，どのように参与者間で共有可能な形で立ち現れているのか，認知言語学的考察を加え, 整理することを試みる．

2. 方法

対象データは，大学生 6 名による合意形成目的の議論データ 18 対話(平均 20 分, S.D. 1.5)であり，時間情報を伴った発話内容の書き起こしがある．これらに談話標識を付与し(後述例中の{D_})，分析のための，発話単位に区切った．話し合いというデータの性質上，主張の際には，「根拠」と「理由」の提示が期待されるので，これらに相当する部分が特定できれば，主張の評価や別の主張との対比関係を分析しやすい．そこで，話し言葉の統語的，意味的まとまりを考慮した節単位境界およびその切れ目の強さを表す節境界ラベルを利用し，理由節（理由)や，挿入節(根拠)を，境界として含み，対話的要素(介入による言いさしなど)を加味して発話単位を認定し，一人の話者による連続した発話単位をまとめて発言(主張や反論)とした．

次に，各発言の関係記述を試みた．合議目的の話し合いの場合，最終的な合議をメインタスクとすれば，各自の意見表明，合議案の作成などのサブタスクが存在し，段階を追って進められることが望まれる．このサブタスクに依存して対話のダイナミクスは大きく変わるが，本研究では，それより下位の各人の発言間の対比関係の特定・分析を進めた．ただし，矢野ら(1998)も指摘しているように，対話においては，自らの先行発言に対して不同意を表明するような行為も珍しくはなく，同意／不同意発言の対比対象の特定に関して，柔軟でなければならない．これらの点を考慮し，1) ある発言に直接対応する発言，2) その発言が，何かに対する不同意的評価を伴う場合，その対比対

象を特定した(複数存在する場合は再隣接のもの).そのうえで，対比談話標識「でも」の用法を中心に，発言間の論理的整合性等について分析した.

3. 分析結果

陳(2008)によれば，日常会話における「でも」は，対立予告，情報追加，話題移行の三種類に機能分類され，さらに話題移行は，話題発展，話題回帰に分類される(必ずしも独立でない)．日常会話では話題発展が最も多いが，話し合いにおいても，同様の使われ方が見られる(A～F は話者記号).

例１　b21（書籍の将来的な完全電子化の是非）
1F：～略～紙より：、ディスプレイの方がいいのかな：っていうふうに思いました/
2B：{D_でも}電子化ってなかなか、慣れる、慣れ親しむのに時間はかかりそうですよね/+けっこう、他の人とかも、おと：しよりとか/
3A：{D_でも}三十年後とかになって子供ぐらいの世代はみんなそれしか知らなかったりね/
4B：あ、確かに/{D_でも}確かになんか流れ的には多分電子化なってる：でしょうね/

1F の発話に対する 2B の「でも」は対立予告，続く 3A の「でも」はその 2B に対する対立予告，情報追加，話題移行の全ての側面を併せ持っていると考えられる．それに続く 4B は，先ず 3A の発言に同意する．その結果,「でも」で始まる後続発話で自らの 2B での主張を弱めており，対立予告，話題移行，の両側面を持つが，その対比対象は 2B となっている．話し合いにおいては，自らの主張に対して，異なる見方を提示されることによって，その主張を覆す，あるいは弱めることは珍しくないし，最終的な合議のためには，むしろ必要な過程である．4B における「でも」の用法が不自然でない理由は，次のように考えられる．話者 X による，発話 T での主張を Px(T)とすれば，

$P_A(T)=\mathrm{Disagree}(P_B(T\text{-}i))\rightarrow P_B(T+j)=\mathrm{Agree}(P_A(T))$

となれば，先行する自身の主張 $P_B(T\text{-}i)$を自ら否定，あるいは軟化させていることが参与者間で共有されることとなり，であるからこそ,「でも」による自主張への対比が可能になっていると考えられる.

次に「でも」を伴わない反論例を観察する.

例２　a12（テーマ：貨幣の完全電子化の是非）
1D：お金だっ(0.3)で、盗まれるんだったら自分が持ってるだけで：済むけど：/なんか電子マネーだったら～略～次の月も使われたりするのかな：、ってゆう、ところの、怖いかな/
2A：そうっすね：/僕ももちろん怖いですけど/～略～(現金が)銀行にあるわけでは、ないですし/それが悪用される：のと：、の：、完全に電子化したあとで、悪用されるのってそんなに変わらないような、気もするんですね/
3D：確かに/{D_でも}悪用されたとしても保険とかがあったら/+戻ってきたりするように：したら：/
4E：改善はできるっていうことですね/

A は既に電子化賛成を主張しており，2A は 1D に対する反論となっている．このとき，例 1 の 4B 同様，2A は一旦 1D に同意する．にも関わらず，変わらず反論足り得るのは，(同意＋)「もちろん～けど」という用法に依拠していると考えられる．節末の接続助詞「けど」は，会話では必ずしも対比を予告しないが，ある種の副詞が前置する場合，先行発話への対立予告が参与者に認知され得る.

4. 考察

例 2 の 3D の「でも」は，例 1 の 4B に近い．もし，これらの「確かに」の後に「～けど」が添加されれば，続く「でも」が対比させるのは，自身の主張ではなく，先行する他者の主張であることが予告され，その後の発話は不自然となるだろう．逆に例 2 の発話の「～けど」の後,「でも」が挿入されてもそのまま反論足り得る．このことは，対比談話標識とその直前の発話の形式が，話し合いにおける反論(不同意)の構造理解に寄与し得ることを示唆している．無論，不同意の形は，これらだけでない．沈黙や，ある種のフィラーを伴う同意の保留，対比のない話題移行など，いくつかのパターンが見られ, 現在整理を進めている.

謝辞

この研究一部は，JST/Ristex および科研費若手研究(B), 21720157 の助成を受けて行われています.

引用文献

陳相州(2008)日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態．言葉と文化, vol.9, 237-252
Fraser, B. (1996) Pragmatic Markers. *Pragmatics* , 6:1, 167-190.
Pomerantz, A (1984) Agreeing and disagreeing with assessments. *Structures of Social Action*. Cambridge. Univ. Press, 57-101.
Schifrrin, D (1987) *Discourse Markers*. Cambridge. Univ. Press.
矢野博之,伊藤昭.(1998)協調作業対話における不同意表現の使われ方. Tech. rep of IEICE, HCS, 97(506), 53-59